

ソニー創業者の井深大は、戦後日本が科学技術で復興するためには、理科教育こそ重要だと考えていました。井深は日本初のテープレコーダーやトランジスタラジオを発売し、会社経営がようやく軌道に乗り始めた1959年に、「ソニー小学校理科教育振興資金」の贈呈を始めました。

当時の贈呈式当日に、井深大から受賞校の先生方へ贈ったメッセージをご紹介します。

※内容および名称・肩書等は当時のものです。

## 第1回（1959年） ソニー小学校理科教育振興資金贈呈式

### 「次の世代のために」 井深大 ソニー株式会社社長（当時）

#### 社会に報いる仕事を

本日はソニーの小学校理科教育振興資金の贈呈式にあたりまして、審査を親しくやっていただきました三先生<sup>(※)</sup>のご臨席を得まして、また地方のご遠方から皆さまがたのおいでをいただきまして、この贈呈式を行うことができますことを非常に嬉しく思います。

私どもの会社は、戦後出来たのですが、技術的な研究に努力してまいりまして、だんだん収益もでてきました。私どもの会長（万代順四郎氏）は、先月なくなられたのですが、いつも会長は、「会社はうんともつけた方がよい。そのかわり何か世の中のためになることをやってくれ。」と口ぐせのように言っておられました。私どもも、ようやく利益もでてきましたので、何とか社会にお報いしたいと考えていたわけでございます。

それで、これについて一体どのような方法があるだろうかと、専務などと相談していたのですが、われわれは夢をもった仕事を一生懸命やっております、この夢を実現するために金も使い、研究もしてきているのですが、やはり社会にお報いするには、その夢を実現していくのが、われわれとしても一番望ましいという結論がでてきたわけです。

それで、自分のことになって、はなはだ恐縮ですが、私は、最初、東京の小学校に入学しましたが、しばらくして愛知県の方に参りました。そこから北海道に移り、北海道からまた愛知県、さらに神戸と、5回も変わりました、転々としたわけです。一番長かった愛知県の小学校で2年から5年まで育ったのですが、いまでも思い出すのは、薄暗い理科の標本室がありまして、そこからアルコールのおいがしてきたり、はく製やウイムスシャフトの発電機が置いてあったりして、ガラス戸棚の中に入れて鍵がかかっていました。私たちは、さわってみたいなあと思いながら、標本室の掃除当番などやっていたことを思い出しました。

#### 電気に魅せられて

そうした田舎にありまして、今日のようにラジオやテレビのない時代で、何か自分のはけ口を見つけ

たいと、しきりに自分の胸にえがいていたわけです。私の父は早く亡くなりましたが、祖父が、当時、愛知県の郡長をしており、食うにはこまらなかつたし、また相当のものも買ってもらえました。

このあいだも、毎日新聞の“茶の間”の欄に書いたのですが、そのとき私の一番印象にのこっていますのは、電鈴と三号平角乾電池というのと、絹巻線数メートルを田舎の時計店で手に入れたことです。当時は電気屋もなければ、おもちゃ屋もないので、時計屋が唯一の文化的なおいのする店だったわけです。そこに偶然あったベルをねだって買ってもらいました。これが、私が電気屋になるキッカケです。

これは後でこじつけているのかも知れませんが、私にはそう思えてならないのです。そこで嬉しくて、うれしくて、夜中に起きてベルをならして、祖父にどなられた記憶ももっています。ベルがいつのまにか分解され、コイルがとられて残骸になってしまったのですが、こういうことが積み重なって、私を電気屋に導き入れることになったのだらうと思います。

## 少年、少女たちの夢を育てよう

いろいろ専門を研究なさっていらっしゃる諸先生を前にして恐縮ですが、あらゆる少年少女は夢もっていて、その夢がだんだん固まってきて、自分の行く道が決まってゆくのではないのでしょうか。その人生の方向を決める雰囲気をつくってやるのが、皆さまがやっていらっしゃるお仕事だと思い、そのお仕事に少しでもお手伝いができたらと考えつき、まず茅先生（当時、東京大学学長）のところにお伺いしました。

「こういうことをやってみたいのですが、先生いかがでしょう」

と申し上げたら、先生は私が想像したよりももっと喜んでくださいます

「これはいいことだから一生懸命やれ」

とご賛同を得ました。それで私どもも非常に力を得まして、篠原先生（当時、科学技術庁次官）や内藤先生（当時、文部省初等中等教育局長）にもお願いして、この計画を決めたようないです。

私どもの成し得ることは、非常に微々たるものではあります。次の世の中を背追って立つ若い人たちに、よい環境を与えてやることの万分の一でもお役にたてば、私ども望外の幸せだと思います。

## 全国からの報告書に感激

全国から寄せられました報告書を見せていただきまして、これは後ほど諸先生からご意見をいただけたらと思いますが、実際感激いたしました。地方にありまして、これだけ教育に対して一生懸命になっていらっしゃるということを、われわれ非常に感激いたしまして、われわれの企てが、無意味でなかったことを非常に嬉しく思っております。

こういうことがキッカケとなって、このような計画が全国で起きて、そのような新しい環境の中で子どもたちが成長していくことが実を結んでできましたら、私どもとしては、こんなに嬉しいことは無いと

思うしだいです。

はなはだ妙なおあいさつをいたしました。こうした私どもの気持ちをお汲みとりくださり、多数の皆さまがたがご賛同くださって、非常に熱心な報告書を寄せてくださいましたことは、私ども本当にお礼の申しようもないしだい。ただ発表から締め切りまでの日数が非常に短うございまして、皆さまがたにご迷惑をかけたこととお詫びいたします。

こういう企ては今後もできる限り続けてゆきたいと思っております。

今度ご応募いただいた皆さまの論文を読ませていただき、ほとんど甲乙がなく、差をつけるのに審査の先生方も非常に苦勞なさったようです。また、落ちられました方の中にも非常によいものがありましたので、最初の計画を変えまして、選外佳作16校をつくりましたのも、こうした関係からなのでございます。

### 真剣な審査を重ねて

最後に、今日ご臨席賜りました三先生には、この企てに非常なご賛同を得まして、だいたい全国からご応募いただいた論文のあら選びは、会社でいたしましたのですが、数十通はお忙しい時間をさいて、真剣に読んでいただきました。審査用紙の備考欄を見ますと、三先生ともたくさん書き込みをしておられて、審査会の席上でもそれぞれの学校の内容についてずいぶん検討してくださいました。

社会的には偉い先生がたですけれども、決して形式的に審査をしてくださったのではなく、まごころをこめて審査してくださったことを、皆さまにご報告申し上げたいと存じます。はなはだ簡単ではございますが、私のあいさつといたしたいとおもいます。

※三先生： 当時の審査委員である茅誠司氏（東京大学学長）、篠原登氏（科学技術庁次官）、内藤誉三郎氏（文部省初等中等教育局長）のこと



第1回ソニー理科教育振興資金贈呈式